



第 144 回鶴見大学図書館貴重書展 + 中古文学会 50 周年記念連携企画



《講演》

伊勢物語 幻の「こしきぶのないしほん小式部内侍本かりのつかいほん（狩使本）」

—その復元はどこまで可能か?—

〔日時〕 11月5日(土) 14時開演

〔講師〕 久保木秀夫 (本学文学部准教授)

〔会場〕 図書館地下1階ホール \*参加費無料・事前申込不要

平成 28 年 10 月 19 日(水) — 11 月 19 日(土) 日曜・祝日閉館

〔会場〕 鶴見大学図書館 1階エントランス

〔時間〕 平日 8時50分～20時00分 土曜 8時50分～18時00分

但し、紫雲祭期間中の10月23日(日)は展示のみ催行(9時00分～17時30分)

## ごあいさつ

鶴見大学図書館がこれまでに収蔵してきた古今東西の貴重書群の中でも、核のひとつとなっているのが、『古今集』や『源氏物語』をはじめとする、古典仮名文学に関する古典籍や古筆切です。ちょうど本年、中古文学会という全国規模の学会の創立50周年にあたっていますので、祝賀の意を込め、同学会との連携企画として、平安時代（中古）仮名散文にほぼ特化した展示を企画してみました。

その際ですが、本展のタイトルに、あえて「流布本（るふぼん）」「異本（いほん）」という言葉を含めてもみました。古典文学の大きな特質のひとつとして、同一作品であるにも関わらず、写本や版本によって、その内容が異なっている場合が多い、ということが挙げられます。それらの中で、最も世間に広まって、最も読まれていた本文（を持つ伝本）を「流布本」と認定し、それとは相当以上に異なっていたり、流布した痕跡を見出しにくいような本文を「異本」と認定する、というのが、学界的な通例となっている、と言えそうです。

もっとも、たとえ今日「流布本」認定されている本文であっても、少し調べてみただけで、必ずしも全時代を通じて「流布本」だったなどとは言えそうにない、といった事例が、すぐにいくらか見つかります。あるいは今日において、一度でも「異本」認定されてしまうと、「流布本」に対して「劣っている」イメージが付け加わってしまうのでしょうか、活字テキストの底本にされることも、注釈が付けられることも、そもそも研究対象とされることすらなくなってしまい、ついには存在自体が忘れ去られてしまうといったことなども、驚くくらい頻繁にあります。その「異本」がかつては「流布本」だった時代があったのかもしれないのに、です。

要するに「流布本」「異本」という分け方は、一面で有効な場合もありますが、また一面では、せっかくの研究資料を無価値にしてしまいかねない、レッテル貼りになる場合もあるのでは？ということです。そうした問題意識を相応に持ちながら、選んでみたのが、今回の展示書目のうちの多く、という次第です。

この展示解題で、その旨、はっきり書いてある場合もあれば、そうでない場合もあります。展示解題はあくまで参考程度ですので、ぜひ原本資料そのものをご覧いただきながら、以上のような問題を考える・考え直す、きっかけのひとつにでもしていただければ幸いです。

とは言いながら、もちろん以下の解題も、真面目に執筆しています。文学部教員が担当するのは当然ですが、のみならず、文学部ドキュメンテーション学科の3～4年生や、同学科出身の大学院生、数名も、執筆に加わりました（担当者名は各解題末尾に明記してあります）。また展示書目の陳列に際しては、同学科の専門科目「古写本演習」履修生のうちの有志10名以上が活躍しました。これらの点、ぜひとも特記しておきたいと思います。

大学図書館の展示ですので、あれこれ専門的なことを多々書き連ねましたが、そうしたことを含めても、含めなくても、それぞれに個性横溢する原本資料の数々を、ご堪能いただければ、と願っています。

文学部ドキュメンテーション学科  
久保木 秀夫

## 出陳リスト

(前期：2016年10月19日～10月31日／後期：11月1日～11月19日／＊は本学教員蔵)

- 1 『源氏物語』大型本 賢木巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅
- 2～3 『源氏物語』大型本 薄雲巻 断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装各1幅
- 4 『源氏物語』桐壺巻 巻末部分 断簡 一条兼良筆識語 室町時代中期写 古筆手鑑所収1葉
- 5 『狭衣物語』巻一 巻頭部分 断簡 伝蜷川親当筆 室町時代中～後期写 古筆手鑑所収1葉
- 6 『狭衣物語』巻一 巻末部分 断簡 伝蜷川親当筆 室町時代中～後期写 軸装1幅＊
- 7 『大和物語』 巻頭部分 断簡 伝後水尾院筆 室町時代末～江戸時代初期写 古筆手鑑所収1葉
- 8 『栄花物語』巻二十七「衣の珠」 巻頭部分 断簡 伝冷泉為相筆 鎌倉時代末期写 軸装1幅
- 9 『枕草子』断簡 伝梶井蜻庵筆 室町時代後期写 古筆手鑑所収1葉
- 10 『竹取物語』断簡 伝後光厳院筆 室町時代写か 台紙貼1葉＊ ◎後期
- 11 『竹取物語』 江戸時代前期写 列帖装1帖
- 12 『うつほ物語』俊蔭巻 江戸時代前期写 奈良絵本 卷子本1軸
- 13 『うつほ物語』俊蔭巻 [元和～寛永]刊 古活字版 袋綴1冊
- 14 『伊勢物語』 伝小堀遠州筆 藤原定家筆模本 室町時代後～末期写 列帖装1帖
- 15 『伊勢物語』 伝安楽庵策伝筆 室町時代後～末期写 列帖装1帖
- 16 『参考伊勢物語』上下并附録 屋代弘賢校 文化14(1817)年 恩頼館蔵板 不忍文庫旧蔵 袋綴3冊＊
- 17 『伊勢物語』伝藤原為家筆本・佚文模刻 天保9(1838)年・詮丈(屋代弘賢)刊 1紙 ◎後期
- 18 『源氏物語』柏木巻・巻末佚文 文政4(1821)年 源(屋代)弘賢刊 1紙 ◎前期
- 19 「源氏物語系図」 室町時代末期～江戸時代初期写 巢守三位本 折本1帖
- 20 『紫明抄』残簡 伝称筆者未詳 鎌倉時代末期写 列帖装8丁分
- 21 与謝野晶子『梗概源氏物語』自筆原稿 原稿用紙70枚分 折帖2帖(改装)
- 参考 渡部栄『源氏物語 従一位麗子本之研究』 著者自筆識語本 1936年 大道社刊 1冊＊
- 22 『夜の寝覚』散佚部分 断簡 伝後光厳院筆 南北朝時代写 1葉＊
- 23 『浜松中納言物語』巻二 江戸時代初期写 祖型本 九条家旧蔵 袋綴1冊
- 24 『唐物語』 江戸時代前～中期写 袋綴1冊
- 25 『長恨歌』 [江戸時代中期]写 川瀬一馬旧蔵 継紙4紙
- 26～27 『長恨歌抄』断簡 伝日野輝資筆 室町時代末期～江戸時代初期写 マクリ1葉＊・ 軸装1幅＊
- 28 『懐風藻』 天和4(1684)年・[京]長尾平兵衛刊 袋綴2冊
- 29 『新撰和歌集』 [元禄8(1695)年・大坂・河内屋吉兵衛等3]刊 後印 阿波国文庫旧蔵 袋綴1冊
- 30 『土佐日記』 寛永20(1643)年・京・風月宗智刊 契沖手沢 彰考館・川瀬一馬通蔵 袋綴1冊
- 31 『土佐日記』 [寛永20(1643)年・京・風月宗智]刊／京・出雲寺和泉掾求版後印 袋綴1冊

### 1～3 『源氏物語』賢木巻(1)・薄雲巻(2～3)大型本断簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装各1幅

『源氏物語』のいわゆる「河内本」の本文が書写された大型本の断簡3点。河内本は河内守源光行・親行の2代によって、鎌倉時代中期に校訂された本文のこと。室町時代前～中期頃までは相当に流布していたようであったが、やがて藤原定家の青表紙本（に該当すると目された本文）に取って代われ、明治時代に「再発見」されるまで、幻の本文ともされていた。

その河内本の最古写資料として、かねてより注目されており、近年も研究の相次いでいるのが、伝称筆者を藤原為家（時に為氏）とする大型本の一群である。縦約30センチという特徴的な寸法、その他いくつかの徴証から、いわゆる金沢文庫本そのものか、そうとまでは言えなくとも金沢文庫周辺、ひいては鎌倉周辺で制作された写本であるか、という可能性などが指摘されている。

この大型本、五十四巻のうち一巻すべて現存している場合もあるが、残簡・断簡として部分的にしか伝わっていない場合も多い。当該断簡3点も、そうした一群にひとまず属させ得るものである。

うち、1の賢木巻断簡（「なからふる…」）は、縦30.0cm×横26.3cm。ただし右から9.9cmに紙継ぎがあり、それを境として左右の料紙とで本文が連続していない。右は桐壺院一周忌に際し、光源氏からの贈歌に藤壺が返歌した場面、左はそれより前の巻頭間もない、光源氏が六条御息所のいる野宮を訪問する場面で、進行順となっていない。呼び継ぎの際、順序にはあまり拘らなかったか。

次の、2の薄雲巻断簡（「にまいりつとひたまふめる…」）は、縦32.0cm×横25.5cm。料紙右端上部にあるのが本来の綴じ穴痕か。また、それよりやや左余白にあるのが、補強のために追加された綴じ穴痕か。3も同じく薄雲巻断簡（「みかとはあかす…」）で、縦32.8cm×横26.4cm。こちらでは補強用の綴じ穴痕のみ確認される。ともあれ2と3はそれぞれ1面分（欠行なし）とみてよいだろう。2ではシミや汚れ、摩滅がやや眼に付くものの、料紙はいずれも上質の白斐紙である。

さてこれら3点を含む、大型本の残欠本や残簡、断簡に関しては、もともと一部の揃い本であったのか、異なる写本複数が別個に分割されて、結果的に一群を成しているように見えるのか、といった難しい問題がある。また河内本の最古写資料として、河内本を研究する際の基準本文と成し得る可能性も有しているが、現実的にどのようにすれば有効活用できる状態にまで成し得るか、といった点もなお不透明なところが残る。これらを言い換えれば、大型本の現存資料群には依然多くの課題があつて、それだけに今後いっそう研究し甲斐のある一群、ということになる。未公刊の古筆手鑑中にも、関連しそうな未紹介の断簡もままた見出されるようである。（久保木秀夫）

### 4 『源氏物語』桐壺巻断簡 嘉吉3(1443)年ほか一条兼良筆識語 手鑑所収1葉

『源氏物語』桐壺巻の巻末部分の断簡。縦26.0 cm×横17.4cmの斐紙。国文学研究資料館にはこの桐壺巻の巻頭部分が蔵されており、それを含めて現時点では10葉近くのツレが確認されている。

当該断簡においては、本文部分4行のあとに①「嘉吉第三曆中秋廿九日、以親行正本校合了（花押）」（墨）、②「文安二年七月、以為相本校合了、以朱注付了」（朱）という識語2種が記されている。これらによって、まず嘉吉3（1443）年以前に当該桐壺巻が書写されていたこと、かつ同年に「親行正本」

——源親行が校訂した河内本の、親行本そのもの、と認定されていた1本だろう——によって校合が加えられたこと、また2年後の文安2（1445）年に、今度は冷泉為相本によって、朱筆校合がさらに加えられたこと、が明らかとなる。本行部分に施されている朱筆の傍書が、この②の時の校合結果とみてよいだろう。①②の識語、及び①の花押は、伝称筆者とされている一条兼良自身のもの、とおそらく判断できそうで、兼良による源氏研究の一端が垣間見られて貴重である。

のみならず、これとほぼ同時期に、歌僧正徹もまた、②のそれと同一とおぼしき「為相本」を「青表紙書写之本」と認識した上で（実際にそうだったのかは不明なのだが）校合していたこともわかっており（『源氏物語』正徹本識語）、当時における『源氏物語』本文整理の具体相や、河内本・青表紙本等の伝来・流布・撮取の状況、両本に対する認識等々、さまざまな側面が垣間見られて有益である。その他いくつかの関連資料や、連鎖的に生じてくる問題など、久保木秀夫「嘉吉文安年間における冷泉為相本の出現」（『源氏物語の始発』所収、2006竹林舎）参照。（久保木）

## 5～6 『狭衣物語』巻一断簡 伝蜷川親当筆 室町時代中期写 手鑑所収1葉（5）・軸装1幅（6）\*

『狭衣物語』とは平安時代後期(1100年頃成立と推定)の物語であり、『源氏物語』の影響を大きく受けている秀作として知られる。源氏の宮に対する狭衣の遂げられぬ恋を描く。全4巻でまとめられており、作者は六条斎院宣旨とされている。

当該断簡のうち、5は巻一の巻頭、6は同巻末を書写したもの。巻頭部分の5は縦26.3cm×横18.0cm、字高23.0cm、全11行。手鑑に収められている。極札に「蜷川新右衛門親当〈少年の〉」とあり「守村」の極印が捺されている。篋の目の跡が鮮明に残る断簡である。左下部に手沢の痕があることから、書き出しが見開き左面であることがわかる。左上部には手沢とは異なる痕が見られるが、原因は不明。巻末部分の6は縦25.9cm×横19.5cm、字高約22.6cm、全11行。軸装とされている。こちらの左下部にも手沢の痕があり、巻一の巻末という観点から、最終丁の表面という可能性が考えられる。箱に極札が貼られており、「蜷川新右衛門尉親当〈ぬるとも〉」とあり「養心」の極印が捺されている。

また巻頭と巻末を比較してみるに、文字のくずし方や字高からツレであると判断することができる。そもそも両者が揃うこと自体極めて珍しいと言える。

伝蜷川親当筆断簡に関して、久下裕利『『狭衣物語』の古筆切について（1）』（『王朝物語文学の研究』所収、2012武蔵野書院）では、7葉の断簡を紹介し、それらと宮内庁書陵部鷹司本との近似性を論じている。この7葉の断簡と、当該巻頭・巻末の5～6とは、書式からツレだとわかる。

久下論文によるとどうやら伝親当筆断簡と鷹司本は密接な関係にあるようだ。確かに比較してみるとその本文の近似性は一目瞭然である。巻頭・巻末ともに、それぞれ字母の違いこそあるが、文頭や改行位置、2文字の字下げなどの書式も非常に似通っている。

そこで久下論文では、字母の相違点から伝親当筆断簡と鷹司本は兄弟関係（親本が共通）にあると論じているが、それは親子関係（どちらかが親本）でも起こり得ることである。そのため一概に断言することは困難であると同時に、鷹司本の書写年代について究明することで、ようやく互いの関係についての明言に結び付くのではないだろうか。（4年・中村祥一郎）

## 7 『大和物語』断簡 伝後水尾院筆 室町時代末～江戸時代初期写 手鑑所収1葉

縦15.2cm×横16.8cm。おそらくは元列帖装。料紙は楮紙。『大和物語』初段の、それも冒頭部分の断簡であり、まずそれだけで稀珍と言ってよい一葉である。朱による段数注記と合点、及び別筆の勘物がある。

さて当該断簡のように、後水尾院を伝称筆者とする『大和物語』は、現時点で20葉以上が確認される。それらの中には、当該断簡のような素紙のみならず、雲紙や草花描の装飾料紙のものも含まれている。これらのすべてが果たして本当にツレ同士かどうか、やや不鮮明な図版に拠るしかないものも多く、なかなかの確言が難しい。その点可能な限りの精査が不可欠ではあるが、ここでは仮に、書式・筆蹟等の一致具合から、ひとまずはツレと扱ってみることとしたい。

その上で『大和物語』諸本と校合してみるに、いずれの断簡の本文も、野坂家本に代表される、藤原定家の天福元（1233）年奥書本とほぼ合致するという結果が得られる。どちらかと言えば、当該断簡の方に細かい誤写が散見されるが、一方で、野坂家本のやや長めの脱文とおぼしき部分を補える部分が見出されもする。そうした点、伝存数の少ない天福元年本に属する原本資料としてまた貴重と言えよう。

のみならず、非常に注目されるのが、承応元（1652）年跋・承応2（1653）年刊の北村季吟『大和物語抄』で（現存の範囲内において）初めて見られる、いわゆる「付載章段」と一致する断簡が、2葉も含まれていることである。1葉は弥彦神社蔵手鑑『見ぬ世の友』所収分、付載章段1段目、もう1葉は林原美術館蔵『日本古筆手鑑』所収分、付載章段2段目の、それぞれ一部分と本文を同じくしている。

こうした場合に、とりあえず想定しやすいのは、いずれかを先とした（直接もしくは間に1本以上を挟んだ）親子関係、ということだろう。しかし『抄』には、同じ定家奥書でも天福元年のそれではなく、寛喜3（1231）年の本奥書——『大和物語』伝本中では、定家のこの寛喜3年本が、大局的には広く流布したと言えるだろうか——が存しているので、単純な親子関係、というわけではないことになる。おそらくここは、季吟が付載章段の直前で、「世の常のほかなりし」章段を持つ「ある本」に基づいて、それらを「殊に左に書き連ね」た旨注記していた、その「ある本」に該当するのが、完本時の当該断簡そのもの、もしくは同種の本一冊なのだった、と理解すべきところのように思われる。

前述のとおり、付載章段を有する写本として、『抄』に先行するものはこれまで見出されていなかっただけに、今後『大和物語』本文の生成過程を検討していくに際しての、活用すべき資料のひとつとなりそうである。

（久保木）

## 8 『栄花物語』巻二十七「衣の珠」断簡 伝冷泉為相筆 鎌倉時代末期写 軸装1幅

縦16.6cm×横15.2cm。料紙は斐紙。おそらくは元列帖装で、料紙左端の少々の荒れと、左下の手沢痕から、とある丁のオモテ面だったとみられる。軸に極札「冷泉祖為相卿〈院の女御〉（「平井」墨印）」を貼付。料紙左下に墨割印あり。1面10行。うち終わり2行に歌1首が書写されているが、最終行「はなみる人もなき秋なれば」の下の余白に墨汚れのようなものがあり、本来「かへし」と書写されていたものを抹消したものとみられる。ほか1行目や4行目に反転した文字がかすかに見える。ウラ面の文字が残ったものであろう。収蔵箱の蔵書票には「冷泉為相卿／院の女御／云々」という墨書に続き「泥庵

清賞」という朱の楕円印一顆が捺されている。

当該断簡は『栄花物語』巻二十七「衣の珠」巻頭部分の1葉である。松村博司『栄花物語の研究 校異篇』（1986風間書房）と比較してみるに、1行目「かんの殿などの」などは、異本とされる富岡本と一致する（梅沢本「かんの殿」）。その一方で、5～6行目「をのつからをかしきことも」などは、古本とされる梅沢本と一致する（富岡本「おかしき事もおのつから」）。さらに4行目「いゑ／＼」などは、梅沢本・富岡本とも「宮／＼の」で、いずれとも一致しない。

このような場合、本文の説明としては、梅沢本と富岡本の混合（混淆・混交）本文、ただし独自異文もまま見出される、のように為されることが多そうである（同様に、例えば『源氏物語』などでも少なからず、青表紙本と河内本の混合本文、などと解説されたりしている）。が、混合したように見えるということと、実際に両本（と同種）の本文を混合させたかということとは、当然ながら別問題である。また、仮に本当に後者のように、異なる本文同士を、とある段階の誰かが混合させたというのであっても、一体それがどのような環境や状況のもと、いかなる行程で成されたのかということなどあ、なかなか具体的に想起しづらいところでもある。こうした事例に接するにつけ、単純に「混合本文」と片付けるばかりではない、何らかの別の理解や説明の仕方を模索していく必要があるのでは、と思われてくる。

（久保木）

## 9 『枕草子』断簡 伝梶井蜻庵筆 室町時代後期写 手鑑所収1葉

縦18.8cm×横17.8cm。料紙は斐紙。右下紙片に「青蓮院晴庵親王」と墨書。室町時代後期頃写か。『枕草子』「文ことばなめき人こそ」の段の一部分。

『枕草子』の古筆切は大変に珍しく、ほんの10年ほど前まで存在がまったく知られない、という状況が続いていた。が、まず『古筆学大成25』所収の「伝九条道家筆 未詳物語切」（385図）が、「野分のまたの日こそ」の段の一部分であることが、中葉芳子氏によって明らかにされた（田中登氏「物語古筆研究覚書」において言及、『平安時代の新研究 物語絵と古筆切を考える』所収、2006新典社）。伝道家筆とされてはいるが、書写年代は室町時代後期頃であろうか。本文は能因本に近いという。

その後、伝道家筆とは別種の、伝一位局筆の1葉、及び伝姉小路濟継筆の1葉が、鍋島報効会蔵古筆手鑑第1帖・同第2帖にそれぞれ収められていることを確認し得た。伝称筆者は異なるものの、この2葉は室町時代後期頃写のツレと認めてよさそうである。うち前者は「雨のうちはへ降るころ」の段、後者は「正月に寺に籠りたるは」の段に該当。本文は三巻本と一致しており、かつ筆蹟には定家様の趣も備わっているように見られる。

それに続けてもう1葉、当該断簡が、今回新たに発見された。梶井蜻庵を伝称筆者とするもので、やはり室町時代後期頃の写とみてよいか。上述2種とは別種とみられる。この1葉の範囲内では、本文は能因本と位置づけられる。ちなみに当該断簡が『枕草子』であることを最初に看破したのは、不思議のご縁でご一緒した国文学研究資料館館長今西祐一郎氏であった。ここに明記しつつ、御礼申し上げておきたい。

ともあれ『枕草子』の本文の流布状況に関しては、なお不明な点が少なくない。三巻本の奥書や、陽明文庫本の存在などから、室町時代後期頃には、三巻本が比較的読まれていたか、と類推されるところもあった。しかし上述のように、ちょうどその時代（の前後？）の古筆切3種が見つかり、うち2種が

能因本に近しいようだということになると、安易に三巻本が優位だった、などと言うわけにはいかなくもなつてこようか。これより先は、さらなる断簡の博搜に加えて、特に能因本に属する諸本、堺本に属する諸本の、書写年代を初めとする書誌情報の再点検を進めることで、従来とは異なる視界が開けてくるのかもしれない。

(久保木)

## 10 『竹取物語』断簡 伝後光厳院筆 室町時代写か 台紙貼1葉\* ◎後期

縦9.8cm×横9.8cm。料紙は斐紙。1面9行。極札「後光厳院〈女そと〉(「守村」墨印)」。紙背に「岡田／氏蔵」の朱方印1顆あり。

『竹取物語』の本文は、当時において100本近くの伝本を調査したという、新井信之『竹取物語の研究 本文篇』(1944国書出版株式会社)によって、「古本」「通行本」に大別された。ただし「通行本」のうち、書写年次の判明する最古写本は、天正20(1592)年中院通勝書写奥書本(武藤元信旧蔵・天理大学附属天理図書館蔵)という、時代の下るものである。また「古本」は完本としては今現在も、新井旧蔵の江戸時代後期写の1本のみしか見出されていない。要するに、現存最古の作り物語とされていながら、伝本の残存状況には残念ながら恵まれていないのである。

が、そのような中で、古筆切という断片資料でありながらも、南北朝～室町時代初期頃かという、抜群の古写を誇るものとして、伝後光厳院(まれに二条為定)筆の断簡1葉が、新井によって紹介された。かつその1葉記載の本文が、「通行本」ではなく「古本」の新井本の方と一致していると指摘され、それによって(写本としては時代の下る)新井本の、本文上の古さが裏付けられた、とされたのだった。

その後、高田信敬「竹取物語断簡新出二葉」(『国文学研究資料館紀要』10、1984.10)などにより、次々とツレの断簡の紹介や研究が進められ、今日9葉の存在が知られるまでになっている。ただそうした発掘の成果によって、断簡記載の本文が、必ずしも「古本」と一致するばかりではないこと、断簡の独自異文も相応に見出されること、よって『竹取物語』の本文も、時代によってなお流動的であったらしいこと、などが明らかにされてきた。

ところで前掲高田論文では、南園文庫蔵の1葉(=本貴重書展の展示品そのもの)について、ツレ3葉(当時)と比較した結果「かなり似通った文字もある(略)が全体的に線が細く、弱い。また「や」は字形に差あり、別手とするのが穏当」「書写年代も他の三葉より若干下る」としていた。そう言われてみると、確かに当該断簡においては、筆勢に弱いところがまま見られたりなどするようである。

実際、その後の田中登「竹取物語の古写断簡」(『古筆切の国文学的研究』1997風間書房)でも、高田のこの指摘を承けて、新たに紹介したツレ2葉のうちの1葉につき、南園文庫蔵の1葉と「同様なことがいえる」とされている。が、それに続けて(筆勢の弱さや書写年代についての違和感は認めつつ、それでも他のツレとは)「特に区別しない立場を採る」とされてしまった。以降はそれに倣って、なのかどうかは不明であるが、高田の指摘は実質なかったこととされてしまい、ツレはすべて何の問題もないツレ同士、として、今日に至るまで、研究が進められてきたものとおぼしい。

しかしながら、常識的に考えれば、同一典籍から切り出されたツレ同士であるにも関わらず、断簡同士で書写年代が異なるなどということは、書誌学的にはやはり不自然であると言わざるを得ない。よってこの問題に向き合うことなしに、当該断簡についていくら論じてみたところで、資料的性格を的確に

把握することも、それを踏まえて『竹取物語』研究に活用していくことも、できないのではなからうか。

ではこの問題をどのように説明できるのかと言え、何しろ典籍の状態を保っていないわけであるから、相当の難問であり、おそらく明確に論証することなどは（現存資料の範囲内では）不可能に近いであろう。それでも私案をごく簡潔に示しておけば、分割以前の冊子本が当初制作されたのちに、料紙単位か、列帖装であれば括り単位かで、何らかの事情による脱落が生じたがために、室町時代中～後期あたりに補写をした、それを含めて後代分割されるようになった、その補写部分の断簡が、当該の1葉や、田中蔵の1葉だった、ということではなかったらうか。他作品ではあるものの、そのような室町時代の補写部分を実際に持つ古写本が現存していたりもするので、あながち荒唐無稽な見方ではないのでは、と愚考している。もしこのような見方が成り立ち得るのであれば、それと連動して、今度は補写部分の本文の扱いについても、根本的に考え直さなければならなくなってくるはずである。が、このあたり繊細な論証が必要となってくるので、今は指摘のみに留めておきたい。（久保木）

## 11 『竹取物語』 江戸時代前期写 列帖装1帖

縦13.4cm×横14.6cm。薄香色市松文様地龍紋織出し布表紙、その中央に金泥龍欄紋題簽を添付して「竹とり物語」と墨書。見返しは金銀箔吟砂子散らし。品の良い雲母引き料紙を用いた全5括りの列帖装1帖。墨付き78丁、遊紙前後1丁ずつ。おそらくは調度本たるべく制作された上質の写本であり、若干の虫損は存するものの補修もされていて、全体的に保存状態は良好と言える。

さて当該本の本文について、長澤聡子「鶴見大学図書館蔵『竹とり物語』」（『国文鶴見』30、1995.12）は、正保3年（1646）整版本に近似するものの、独自異文も多いと指摘されている。もっとも誤写誤脱に起因するとみられるものも少なくないとのことでもあるが、なお注目に値する本文でもありそうである。またその後、前者の正保版本に関しては、先行古活字版数種のうち、古活字十一行丙本を親本としていたとの指摘がなされた（曾根誠一「正保三年刊整版本『竹取物語』本文の成立」、『花園大学日本文学論究』7、2014.12）。粗々の確認しかできていないが、その十一行丙本に対しても、当該本は異文を有しているようである。加えて、当該本の漢字仮名の別や、仮名の字母といった表記面でも、正保版本や古活字十一行丙本のそれらとの親近性が認められるほどには、目立って共通したりもしない。

こうした点、当該本は単なる「版本写し」などではなさそうであり、『本文集成』や中田剛直『竹取物語の研究』（1965塙書房）所収の校本などをも活用しながらの、あらためての精査が必要となりそうである。

なお贅言すれば、『竹取物語』の本文研究において、今日一般に認められている「古本系」「通行本系」といった大分類や、「通行本系」内における下位分類、またそれらを通じた「流布本」認定、その他いくつかに関しては、根本的なところで当を得ていないのではなからうか、という感触がなくもない。詳細はまた別の機会に。（久保木）

## 12 『うつほ物語』 俊蔭巻 江戸時代前期写 奈良絵本 九曜文庫旧蔵 卷子本1軸

『うつほ物語』 俊蔭巻の奈良絵本。表紙は鶯色菱繫地唐花丸金欄表紙、縦21.1cm×横23.9cmであ

る。見返しは金箔貼りで左下に蔵書印「九曜文庫」(朱方印)がある。

本文料紙は間似合紙で、金揉箔散らしの台紙が裏打ちされている。1面目の本文料紙の寸法は縦15.2cm×横20.4cm(台紙を含まない)だが、横の寸法は面ごとに違いが見られ、一定ではない。

書写年代は江戸時代前期頃。一面13行、字高約13.5cmの写式で書写されているが、挿絵の直前は散らし書きである。本文は俊蔭巻の冒頭から始まり、俊蔭が授けられた秘琴を弾き、文殊菩薩が現れる場面で終わっている。巻全体の約六分の一であり、残欠本である。挿絵は3図あり、濃彩で金泥も使用されているが素朴な印象を受ける。一部絵の具の剥落痕が見られるものの、挿絵の保存状態は良好である。

当該本には桐箱が付属している。箱書なし。保存状態は良く、表紙・見返し・巻緒・本文料紙に裏打ちされた台紙には傷みがほとんど見られない。

当該本は、蔵書印から中野幸一の蔵書である九曜文庫の旧蔵本であることが分かる。この本には比較的薄い料紙が使用され、一面が横長であることから、もとは横長の袋綴本であると考えられる。なお、表紙・見返しはそれぞれ縦の寸法が21.1cm、21.0cmであり、本文料紙の一面の縦の寸法よりも長い。ため、表紙・見返しは改装時のものであると言える。表紙・見返し・巻緒・台紙に痛みがほとんど見られない点から、改装されてからそれほど長い年月が経っていないと思われるが、改装時期は特定できなかった。

本文は、前田家本、幽齋本転写本、延宝5(1677)年版本、文化3(1806)年版本の本文との異同箇所が非常に多い。古活字版との間にも異同が見られ、他の四種に比べては少なく、古活字版に近い本文を持つが、全く同じでもなく、独自の本文を持つ本であると思われる。

挿絵の直前は散らし書きになっている(27面目の挿絵は例外)が、8面目、35面目、40面目の最後にもそれぞれ散らし書きの部分が見られる。挿絵の直前を散らし書きにすると仮定すると、これら3面分にはその次に挿絵が入っていた可能性が考えられる。(修士2年・高橋裕美)

### 13 『うつほ物語』 俊蔭巻 元和～寛永年間刊 古活字版 袋綴1冊

縹色地雷文繫牡丹唐草文様空刷表紙(縦27.1cm×横17.8cm)。外題、表紙左肩後補打付書「うつほ物語上(下)」。内題「うつほものかたり上(下)」。料紙、楮紙。無辺無界。毎半葉11行。字面高さ、約21.0糎。墨付、上冊46丁、下冊39丁。漢字仮名交じり。仮名は連続活字を用いる。尾題「うつほ物語上(下)終」。各冊巻頭に蔵書印1顆を捺すが、印文、印主は不明。

川瀬一馬『増補 古活字版之研究』(1967日本古書籍商協会)の元和寛永中刊11行本第1種口に相当する伝本。(伊倉史人)

### 14 『伊勢物語』 伝小堀遠州筆 藤原定家筆模本 室町時代後～末期写 列帖装1帖

縦17.5cm×17.9cm。列帖装1帖。後補の藍色地唐草文様織出緞子表紙。外題なし。料紙は斐紙。墨付84丁、遊紙前後1丁ずつ。シミや少々の虫損あるも、全体的には状態良。

伝称筆者を小堀遠州とする箱書や鑑定文書複数があるものの、当該本は、遠州ないし某人による単なる定家様の写本、などといったものではなく、とある時点まで伝存していた、定家真筆本を臨模した

1本であると推断されること、書誌学的・国語学的な種々の徴証に基づいた、池田利夫『藤原定家筆蹟模本 伊勢物語の研究』（2009汲古書院）が緻密周到に説くところ。また『伊勢物語』の定家本には、天福本・武田本など数種があるとされている中、当該本の本文はそのいずれにも一致しない、極めて珍しいであること、なども指摘されている。

ところで、同書でなされている指摘のひとつに、当該本の百十一段（79オ～ウ）において、記載される3首のうちの2首までもが、定家筆ではない別筆となっている（と、模写を介してさえも知られる）という点がある。その理由について池田は、百十一段と『後撰集』とでは、問題の2首の歌順が逆となっており、疑問を感じた定家がしばし空白としておいたものの、結局「どの本を調べても歌順同じなので、何かのついでに女房にでも空白部を埋めさせ」たものか、という推論を提示している。が、ここはあるいは、当該本の親本の段階で、すでにこの2首が欠落して空行となっていた（こうした事例は他作品ながらも実際に存する）、それをのちに他本によって、定家が側近に補写させた、といった可能性も考えられないであろうか。単なる憶測ではあるが、一案として書き添えておく。そのほか、なぜ当該本には奥書・識語の類が一切ないのか、なぜ他の定家本と較べて勘物が極端に少ないのか等々、気になるところはいくつも存する。なぜと問うても答えは出ないが、念頭に置いておくべき点ではあろう。ともあれ今後、当該本をいかに有効有益に活用していくか（いけるのか）が、『伊勢物語』の伝本・本文に関する調査研究上の、新たな課題のひとつとなってくるはずである。（久保木）

## 15 『伊勢物語』 伝安楽庵策伝筆 室町時代後～末期写 列帖装1帖

縦18.5cm×横24.0cmの横長本、列帖装1帖。後補の梔子色地瑞雲織出布表紙、外題なし。見返しも後補で布目地桐信夫草文様刷出料紙。1才（白紙）左上に「誓願寺安楽庵筆〈伊勢物語一冊／横折本〉「拝」（印）」という朝倉茂入の極札貼付。料紙は楮紙、全4括り、墨付69丁（なおもう1丁はオモテ表紙と見返しの中に挿入）、遊紙なし。ところどころに補修があるも、全体としては状態良。

伝称筆者の安楽庵策伝（1554～1642）は誓願寺五十五世、茶人・文化人として名を馳せた僧侶であり、笑話集『醒睡笑』の作者としても有名であるが、古写本ないし古筆切の伝称筆者とされることはかなり少ないのではなかろうか。その点、あるいは策伝筆とする、何らかの根拠があったか、と憶測されないこともない。

当該本は、いわゆる百二十五段本と同じ段数・段序であるが、定家本の諸本とも、また百二十五段本に限らない悲定家本の諸本とも一致しない、細かな、しかし夥しい数の異文を有する。それらの中には、時に「古本系」と呼ばれるうちの1本と一致したり、時に「広本系」また時に「略本系」と呼ばれるうちの1本と一致したりもしているが、どれか特定の1伝本なり、1群なりと著しく近似したりすることはなく、それどころか他には存しない独自異文も相応に見出されるようである。

最も顕著な異同としては、百二十五段の最後の1首「つみにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとはおもはさりしに」のあとに「といひてつみにみまかりけるとなり」という1文などが挙げられよう。定家本を含む百二十五段本にこの1文はなく、「広本系」とされる阿波国文庫本（宮内庁書陵部蔵）には「とてなむたゑいりにける」、また「略本系」とされる伝民部卿局筆本（「塗籠本」とも。本間美術館蔵）には「とてなむたゑいりにけり」とそれぞれあるが、当該本とは一致しない。その他の当該本の独

自異文も、単なる誤写誤脱では説明し切れないものが散見される。なお最終丁オモテ面右端に「哥百九十六首有」と注記されているが、実際に数えると209首であり、百二十五段本と一致する。これは注記の誤りであろう。

当該本はこのように、従来の分類の枠内に収めることなどできそうにない、極めて特異な本文を持った、注目すべき写本と位置づけられそうであり、既知の伝本群を視野に入れての、今後の精緻な調査研究が必須であると思われる。

ついでに述べれば、上記でわざわざ「古本系」「広本系」「略本系」のように鉤括弧をつけておいたのは、従来のそうした分類そのものにも問題なしとしないからである。(久保木)

## 16 『参考伊勢物語』上下附録 屋代弘賢校 文化14(1817)年・恩頼館蔵板 不忍文庫旧蔵 袋綴3冊\*

黄緑色地(萌葱色地)小葵文様艶出表紙(縦27.0cm×横18.4cm)。外題、表紙中央朱色刷題簽「参考伊勢物語 上(下)」、同山吹色刷題簽「参考伊勢物語附録」。上冊見返しに「参考伊勢物語 全部/恩頼館蔵板」とあり。同巻首に塙保己一の序、文化10(1813)年3月24日の弘賢の自序あり。次に塗籠本と印本(拾穂抄)の章段比較及び為家卿本と印本の章段比較の一覧が置かれている。内題なし。料紙、楮紙。無辺無界。毎半葉10行。異同を小字双行に記す。字面高さ、約19.4糎。墨付、上冊51丁(自初段至65段)、下冊38丁(自66段至115段)、附録13丁。附録末に文化14年2月袋翁(横田茂語)の跋あり。

刊記(附録・後表紙見返し)「文化十四年仲春刻成/製本/弘所/京都書林(堀川高辻上ル)上村藤右衛門/大坂書林(心斎橋安堂寺町)秋田屋太右衛門/江戸書林(浅草新寺町)和泉屋庄次郎/池端仲町)須原屋伊八/彫工 朝倉八右衛門」。

各冊表紙及び1丁オモテに墨にて抹消されているが「不忍文庫」印が捺されていて、本書が弘賢自身の所持本であったことがわかる。上冊51丁表「相本/終句ねをのみなかめ」の「終」が朱にて「四」に正されているのは、あるいは弘賢によるものか。

『参考伊勢物語』は『伊勢物語』の本格的な本文研究書としては最初のもの。北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』を底本とし、塗籠御本(略称「御本」)、為家筆本(「家本」)、平(北条)時頼所持本(「時本」)、為相筆本(「相本」)、真名本(「名本」)で対校する。対校本には注目すべき伝本が多いが、塗籠御本(大島雅太郎旧蔵本)以外の伝本の所在は不明。(伊倉)

## 17 『伊勢物語』伝藤原為家筆本・佚文模刻 天保9(1838)年・詮文(屋代弘賢)刊 1紙 ◎後期

料紙、厚手の楮紙。縦16.6cm×横30.8cm。

「為家卿真跡本」の62段の次にあった、流布本にはない章段(大津有一『伊勢物語に就きての研究補遺篇』の異本章段B)を模刻したもの。16『参考伊勢物語』では本章段に続けて異本章段C(「むかしおとこ女をきふし…」)もあわせて掲出している。

模刻の筆跡を見ると、たしかに為家の筆に似ているようではあるが、弘賢が所蔵していたものが真に為家筆本であったかどうかは不明。『参考』の弘賢の序によれば、「為家卿真跡本」は檜山坦齋から贈られたものであるという。檜山坦齋は安政3（1774）年の生まれの国学者で、著作に『栄花物語系図』（天保3年序刊）、『花押譜』（文化13年刊）、『皇代記考証』（写本）等がある。書画の鑑定も行い、『皇朝名画拾彙』（文政元年刊）、『本朝画史遺伝』（嘉永3年刊）等も著している。天保13年（1842）の没。

（伊倉）

〔佚文翻字〕むかし女をぬすみてゆくみち／に水のまんとゝふにうなつき／ければつきなんともくせさりければてにむすひて／くわすゐてのほりにければ／もとのところにかへりゆく／かのみつのみしところにて／

おほはらやせかゐのみつを／むすひつゝあくやとゝひく／人はいつらに  
といひてきにけりあはれ（あはれ）

## 18 『源氏物語』 柏木巻・巻末佚文 文政4（1821）年 源（屋代）弘賢刊 1紙 ◎前期

料紙、厚手の楮紙。縦24.8 cm×横35.5 cm。

一部の伝本を除いて青表紙本系統の柏木巻の巻末は、「秋つかたになれば、この君は、みざりなど」で終わるが、河内本系統では後続の一文を有する。弘賢が所持していた（接していた）のも青表紙本系統の伝本であったのか末尾を欠いていた。長年疑問に思っていたところ、欠脱部分を有する「為氏卿筆の本」を得るが、それも「猶末の紙のつぎめはなれうせて『おもひ』といふ詞まで」の本であり、その後博捜し、ようやく「その末」を知ることができたという。「為氏卿筆の本」やその後手に入れた伝本がどのような本であったのか不明ではあるが、河内本系統の伝本だった可能性がある。

弘賢の『源氏物語』の本文に対する関心は、会頭を務めた和学講談所における『源氏物語』の校合作業に発すると思われるが、残念ながらそこでの成果を示す資料等は寡聞にして知らない。

なお、刊行に際し弘賢があえて藤原行成の筆跡を集字したのは、行成が『源氏物語』五十四帖を清書し選子内親王に進上したとする伝承を踏まえてのことか。

（伊倉）

〔佚文翻字〕したまふさまのいふ／よしもなうおかし／けなれは人めのみ／もあらずまことにいとか  
／なしとおもひきこえ／たまひてつねに／いたきもてあそひき／こえたまふ

〔付記〕

屋代弘賢は、考証資料を17～18のような一枚刷りにして、お年玉として毎年仲間内に配布していた。『甲子夜話』に「此頃は好事家、春初には何か一事の考証を版刻して人に施す。…今年（文政7年）屋代太郎が出せるは」として「伏羲氏帝昊金」を挙げる。『夜話』には、他に文明11年の「一条禅閣消息の案」（文政2年）、予楽院模写の「御堂関白道長公書」（文政13年）等も見える。『しりうごと』（著者未詳）は「帝昊金」の他、刊年は記されていないが「封牛考」「日野唯心殿真跡」「阿育王の宝塔の図」「富久者有智、遠仁者疎徳（ふくはうち、をにはそと）」を挙げる。また、馬琴の書翰にも弘賢から「ちらし蔵板」をもらったという記事が見える。森銑三は、弘賢が版刻した刷り物が「現に傳へられてあるものも多」く、「目録を作って見た」と記している（「屋代弘賢」『森銑三著作集』第7巻）が、現在では実物を目にする機会はほとんどなく、そうした点からも17～18の資料は貴重なものと言える。なお、

同時代の「好事家」では近藤正斎や小山田与清等が年始に刷り物を配っていたことが知られる。(伊倉)

## 19 「源氏物語系図」 伝称筆者未詳 室町時代末期～江戸時代初期写 巢守三位本 折本1帖

『源氏物語』関連資料の中には、「源氏物語系図」「源氏物語古系図」のように呼ばれる、多数の作中人物たちを系図仕立てで紹介・解説したものがある。平安時代末期以降、様々な種類の系図が制作されてきたようであり、複数種類が現存している。

当該本もそうした「源氏物語系図」の1点。折帖1帖、縦31.8cm×横14.7cm。市松文様織出金銀欄表紙。外題・内題なし。料紙は斐紙。室町時代末期写か。

当該本が頗る注目されるのは、今日伝わらない「巢守」という巻の登場人物や、その物語内容の一端を記載しているからである。今でこそ『源氏物語』は、全五十四巻と一般に認められているものの、かつては現存五十四巻以外の巻々があったという明徴がある。「桜人」「狭筵」といった巻々がそうであり、また巢守巻もそうである。うち、とりわけ巢守巻に関しては、『風葉集』や、『源氏集』(源氏物語歌集)複数種の断簡その他の佚文資料、関連資料が比較的豊富に伝存している。最近は、巢守巻の本文そのものかと推定される古筆切も紹介されるに至っている。横井孝・久下裕利編『王朝文学の古筆切を考える』(2014武蔵野書院)など参照。

そうした「巢守」巻の佚文・関連資料として、もうひとつ加え得るのが、上述「源氏物語系図」のうちのいくつかであり、そして当該本が、またそのひとつ、なのである。のみならず当該本は、同様に「巢守」巻を含み持つ他系図にも見られない、例えば「明石皇后宮(略)すもりに皇后宮とす」といった独自記載をもまま有している点、「巢守」巻の研究に不可欠な根幹資料のひとつとなっている。久保木秀夫『『源氏物語』巢守巻関連資料再考』(『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』所収、2006新典社)、及び高田信敬「源氏物語古系図(巢守三位本) 解題・翻字」(『古代文学論叢 第十八輯 源氏物語の言語表現 研究と資料』所収、2009武蔵野書院)など参照。(久保木)

## 20 『紫明抄』残簡 伝称筆者未詳 鎌倉時代末期写 列帖装8丁分

縦25.6cm×横17.6cm。元列帖装の残簡8丁分。料紙は楮紙。書写内容は連続するため、元1括りのうちの連続する4紙分だったとみられる。シミや破損などが目立つも補修もされており、1丁目の一部分を除いて判読に支障はない。なお未精査ながら、複数種伝わる『紫明抄』残欠本・残簡・断簡の中に、当該断簡のツレとみられるようなものは、現時点では見出されていない。

『紫明抄』は素寂による『源氏物語』の鎌倉時代注釈書。素寂は河内本の校訂者源光行の男、親行の兄弟にあたり、よって河内本の本文に基づくものとなっている。代表的な伝本として、京都大学文学部研究室図書館蔵本(「京文本」と略)、内閣文庫蔵の一本(「内閣本」)などが知られる。またこの両本は本文に違いのある別種と整理されている。

当該残簡は、本文のみならず書式や使用字母、朱点・朱合点の施され方などが京文本と酷似している。かつ、京文本の影印(『京都大学国語国文学資料叢書27・33 紫明抄 上下』1981～82臨川書店)に拠る限り、京文本の方が新写とおぼしき点、あるいは当該残簡が京文本の祖本的位置にあったか、共通祖

本から派生した兄弟本に近い関係にあったか、とも思われる。

ただし一方、当該残簡1行目の巻首題に「紫明抄巻第二〈自若紫巻／至花散里〉」と記されているが、この巻区分は内閣本の方と一致しており（京文本では「～巻第二〈自若紫巻／至賢木巻〉）、巻ごとの収録範囲が異なっている。さらに一方、京文本と同種とされている京都大学附属図書館本、及びその同類本では、「若紫」から「花散里」を収めていたはずの巻第二が欠落しているともいう。このあたり錯綜していて、なかなか悩まされるが、何らかの点に関連していそうでもあり、各伝本の实地調査と関係性の再検討をあらためて行うべきかと思われてくる。（久保木）

## 21 与謝野晶子『梗概源氏物語』自筆原稿 原稿用紙70枚分 折帖2帖（改装）

『梗概源氏物語』は、与謝野晶子の自筆で書かれた原稿用紙のみが残っている作品で、当該本が孤本と言える。晶子が桐壺巻から夢浮橋巻までのあらすじを、章によっては和歌を用いつつ、原稿用紙に書いていった自筆の草稿である。

当該本は、縦27.0cm×横19.0cmの折帖2帖。三色墨流し文様表紙で、表紙左肩題簽には「源氏物語興謝野晶子自筆草稿 巻上（下）」と書かれている。上下巻合わせて全73丁。また、上下巻共に本文巻頭右下に「香城堂蔵」と長方形陽刻朱印が捺されている。

池田利夫『源氏物語回廊』（2009笠間書院）によると、『梗概源氏物語』は元々原稿用紙のみであったが、本学図書館収蔵後、折帖の装訂になされたという。原稿用紙は四百字詰めであり、左下に「十ノ二十 神楽阪山田製」とある。晶子が山田紙店の近くに住んでいた時期と重なるのは、大正3（1913）年秋から昭和2（1927）年冬までであり、この期間に執筆されたかとも推定され、確かに可能性は高いと思われる。だがあくまで推定の域を出ておらず正確な年代は不明とされる。また、原稿用紙の左右両端に小さな二つの穴が開いていることや、中心には折り目のような筋があることなどから、元々は袋綴の様に綴じられていたことが分かる。

晶子の特徴的な書き方として、『梗概源氏物語』では全ルビを振っていること、それも「女御（によご）」に「女御（によご）」、「更衣（こうい）」に「更衣（こうえ）」としているなど、独特な読み方をしていること、原稿用紙左上部に頁数を振っていること、が挙げられる。

当該本から、晶子の幾つもの推敲の跡や、達筆であることが分かる。出版されたことの知られない、晶子唯一の『梗概源氏物語』であるため、絶大な価値があると言えよう。（3年・新里美咲）

### 参考 渡部栄『源氏物語 従一位麗子本之研究』1冊 1936年12月 初版本 大道社刊

『源氏物語』などの研究者、渡部栄（1913～1991）がかつて所蔵していたという、『源氏物語』古証本のひとつ「従一位麗子本」に関する研究書。当該書はその著者たる渡部の自筆識語を、オモテ見返しに続く遊紙オモテ面に備えているという、ちょっと珍しい一書である。かつその識語の内容がまた次のような、頗る興味を引かれるものとなっている。

予、自貸失此旧著、以来、博搜有歳、悲未得、昭和四十一歳六月廿二日、偶発見於神田一誠堂書屋之棚間、邂逅之想増悲、満於胸、奇珍々々、秘悦以記之、云爾而已、 白楊 渡部 栄

すなわち、かつて渡部は自身所持の『麗子本之研究』を人に貸したまま紛失した状態になっており、長年博捜していたところ、1966（昭和41）年、神保町の一誠堂書店で偶然にも再入手できたという、その喜びを書き付けているわけである（見返し右上に一誠堂書店の売札が貼られていることとも整合）。その時に再入手できたのが、かつての所持本そのものだったのか、単に同書の初版本の別の1冊だったのかは判然としないものの、ともあれ書物と人との奇縁を想わずにはいられない。

ところで渡部蔵の従一位麗子本に関しては、『麗子本之研究』に拠る限り、室町時代後期頃写の袋綴、五十四巻揃い本か、縦32cm×横20cm前後の大型本（これは注目すべき点である）だったようである。一部焼損のあった由であり、また肝心の本文も、全文ではなく、部分的に引用されるのみである。わずかながらも幸いなのは、口絵に従一位麗子本の書影2点が（やや不鮮明ながらも）掲載されている点で、それによって同本の面影をкаろうじて知ることができる。と同時に、同本自体が確実に伝存していたということも、やはり認めてよかろうか。と言うのもかつては（今でも？）、渡部蔵の従一位麗子本の存在自体を疑う向きも一部にあったらしいのである。が、上記のように、具体的な書誌情報のみならず、図版をも載せた形で紹介がなされている以上、少なくとも完全否定はしづらいようにも思われる。ただし、五十四巻揃い本だったかとか、あるいは取り合わせ本ではなかったかとか、一部の巻を欠いた不揃い本ではなかったかとか、であるならば、疑おうと思えば疑える余地も、なお相応にありそうである。

ちなみに「北小路健」名義の渡部の著書『古文書の面白さ』（1984新潮選書）によると、渡部は『麗子本之研究』刊行後、同本を含む膨大な蔵書を携えて満州に渡り、第二次大戦終戦を同地で迎え、日本に引き揚げようとするその直前、現地人に『源氏物語』の二つの桐箱を預けたという（P114）。そこに明記はされていないが、文脈上この「源氏物語」は、渡部蔵の伝中山宣親自筆本、及び従一位麗子本だったと理解されている。その後の両本、特に従一位麗子本の行方は杳として知られない。今日なお世界の何処かに伝存しているのか、それともすでに亡失してしまっているのか。

ついでにもうひとつ。渡部は『古文書の面白さ』で、かつて「古とりかへばや物語」（現存『とりかへばや物語』の改作前のものと位置づけられている）の4冊本（=天下の孤本）をも所蔵していたという（P46～48）。残念ながら略書誌も書影も一切載せられていないが、『面白さ』にはまた、「『古とりかへばや物語』の発見は、昭和十三年五月の満州日日新聞紙上に、原本の写真入りで大きく報ぜられた」ともある（P47）。そこで（もう何年も前になるが）国立国会図書館蔵マイクロ資料で、満州日日新聞の1938（昭和13年）5月の紙面を確認してみたことがあったが、少なくとも同月中の同紙の記事に、それとおぼしきものは掲載されていなかった。『面白さ』は後年になってからの回想録であるため、年月などに記憶違いがあったのかもしれない。前後数年間の記事を細かく点検していけば、その書影が確かに見つかるのかもしれない。かつ幸いにして見つかった場合には、それは実質的に「古とりかへばや物語」の古筆切的な原本資料として活用し得るようになるはずである。が、もし博捜しても最後まで見つからなかった場合には、さて、その結果をどのように受け止めるべきであろうか？（久保木）

## 22 『夜の寝覚』断簡 伝後光厳院筆 南北朝時代写 1葉\*

現存諸本には失われてしまった部分の六半切。縦17.1cm×横14.7cm。料紙の焼けが強く、紙質・手沢等を確認しがたいけれども、斐紙か。紙背に「後光厳帝 さへと念し（「古筆」）」および「後光厳帝

〈諱八弥仁光厳帝／第二子〉／文和二年十二月二十七日即位応安七年／正月二十九日崩寿三十七」と墨書のある紙片を貼る。「古筆」の楕円朱印を押した極札様の紙片は時折見かけるもので、近代の古筆家関係者によるか。ただし管見に及んだ例は全て薄手の楮紙を用いており通常の極札とは異質、略式であろうが、詳細不明。専門家のご意見を拝聴したい。焼けの状態から判断して、相当長期間屏風に押されていたものが一旦剥がされ、その後、極札様の紙片を付したのであろう。

書写年代は南北朝時代、宸翰様であることが注意され、『松浦宮物語』伝伏見院宸翰本や掲出の切と伝称筆者を同じくする『松浦宮物語』の他、『葉月物語絵巻』・『枕草子絵巻』等も類似の書風に属し、鎌倉時代末～南北朝期の書写資料としては、やや珍しいのではないか。この書風でいささか特異な作品が写されていることの意味は、なお詮索を要する。

『夜の寝覚』（寝覚）の通行本文には中間部と末尾とに大きく欠落した箇所がある。これを埋めるべく研究者の努力が積み重ねられ、一般的には改作本によって間接的に筋を埋めているけれども、散佚部分を直接補うことが可能なのは、掲出の伝後光厳院筆六半切と伝慈円六半切、および『寝覚め物語絵巻』（大和文華館）であり、その点で、考証資料としての価値は高い。伝後光厳院筆六半切は現在10葉以上報告され、今後さらなる集成が行われれば、散佚部分復元に大きな力を発揮するであろう。

とは言え、改作本（中村本・三条家本）の基づくところは、通行の五巻または三巻本と異なる系統の一本であつたらしく、したがって中世以前おそらくは平安時代から、『夜の寝覚』に複数の系統が存在したであろう。確かに伝後光厳院筆六半切が『夜の寝覚』の散佚部分と認められても、現存本文と重なる切を見ない以上あくまでも伝後光厳院筆本『夜の寝覚』の復元に留まり、五巻または三巻本と直接結ぶことには慎重な配慮を要する。『夜の寝覚』の古筆切が、通行本文の散佚部分に限って残されているのは、摩訶不思議と言うほかない。なお、当該物語の切に関しては「寝覚める古筆切」（『武蔵野文学』2014春号）を参照。  
(高田信敬)

## 23 『浜松中納言物語』巻二 江戸時代初期写 祖型本 九条家旧蔵 袋綴1冊

縦24.9cm×横18.2cm。袋綴1冊。薄藍色無地表紙、左上に題簽が部分的に残っているが、現状外題なし。また内題もなし。料紙は斐紙、墨付48丁、遊紙前後1丁。ウラ見返し左上に後筆「二」と墨書（巻二の意であろう）。虫損あるも、補修もあり。

菅原孝標女作かとされる『浜松中納言物語』の現存伝本は、室町時代末期あたりのものかとおぼしき共通祖本に発したとされ、現存伝本の数自体は多いものの善本には恵まれず、かつそのほとんどは首巻と巻五を欠いている。中で浅野本・尾上本と通称される2本のみが巻五を有しているものの、巻四までとは別種の本文を取り合わせたものという。さらに本文上、甲本・乙本と大別される伝本にはそれぞれに脱行があり、相互に補ってもなお補い切れないうところが残る、といった問題もあった。

そこに出現したのが当該本で、巻二のみの残欠本ながら、甲乙両類の本文上の欠点を補い得る善本であること、かつ、おそらくは甲乙両類の共通祖本（「祖型本」との謂とほぼ同義とみられる）的な位置にあるだろうこと、が明らかにされた。池田利夫「祖型本浜松中納言物語巻二（零本）の新出」（『源氏物語回廊』2009笠間書院）参照。

のみならず同論初出（1997年）後、石澤一志・新美哲彦によって、国文学研究資料館寄託・九条家

旧蔵『我身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』が同筆同体裁の写本であることが報告され、それを端緒に、やはり同筆同体裁という、九条家旧蔵の「ツレ」の典籍が次々と見出されていっている。今現在も、石澤一志が精力的にその調査研究を推進中で、これらが九条道房（1609～1647）の整理・書写にかかる古典籍群たることが明らかにされる等、当初予想を遙かに超えた、大変な拡がりを見せ続けている。池田「祖型本『浜松中納言物語』の写し手は誰」（同書）、また石澤一志「九条家旧蔵本の行方」（『これからの国文学研究のために』所収、2014笠間書院）など参照。（久保木）

## 24 『唐物語』 江戸時代前～中期写 袋綴1冊

縦26.0cm×横18.3cm。袋綴1冊。薄縹色無地表紙、日焼痕あり。料紙は楮紙、墨付64丁、1面11行書。

『唐物語』研究においてははまだ取り上げられていない1本。『唐物語』の伝本は、池田利夫『日中比較文学の基礎研究 補訂版』（1988笠間書院）によって、大きくA・B・Cの3類に分けられている。うちA類本の特徴として「写本云／文安元年八月十七日感得」という文安元（1444）年識語があること、他類にある「かき曇りふる雪はしめて晴れ」（第一話、A類本「月の光きよくもすさまじき夜…」の直前）、「なとも世にたくひなき程に侍りしかは」（第二話、A類本「…またいろいろかたち」と「みる人間く人さなから…」の間）といった本文がないこと、などが挙げられている。当該本も同様に、これらの記載なく、A類本と同じく短い文となっており、かつ文安元年識語もあるので、A類本と判断される。

A類本の中では尊経閣文庫蔵本が一番古くて良いといわれている。一方、同じA類に、小林保治『唐物語全釈』（1998笠間書院）で取り上げられた名古屋大学本がある。この名古屋大学本の筆跡と当該本の筆跡がやや似ていたり、本文のずれが共通したりしている点、当該本は、特に名古屋大学本と近い本文を持っている可能性がありそうである。転写の際に関わりのある本同士であったかもしれない。

（3年・森田栞）

## 25 『長恨歌』 江戸時代中期写 川瀬一馬旧蔵 継紙4紙

内題「長恨歌」。斐紙（一紙ほぼ縦36.0cm×65.0cm）4紙を継ぐ。全長約257.5cm。毎葉15行前後。毎行14字（7言2句）。行書体で書きはじめ、第2紙後半より草書体になる。模写本の可能性もあるか。

印記、「三袖書屋」（長方形朱印・巻頭）、「一馬」（六角形印刻朱印・巻末）を捺す。（伊倉）

## 26～27 『長恨歌抄』断簡 伝日野輝資筆 室町時代末～江戸時代初期写 軸装1幅・マクリ1葉\*

『長恨歌』の各句を掲げ、訓を傍書し、かつ平仮名書きによる注釈を施した抄物の断簡2葉。朱の訓点・読点も書写と同時期のものか。うち26は縦24.2cm×横15.2cm、27は縦23.6cm×横16.4cm。日野輝資（1555～1623）が伝称筆者とされることは稀であり、典籍時に何らかの根拠となる記載を有していたかとも憶測される。

当該『長恨歌抄』断簡については、小林強「清原宣賢関連の古筆切について」（『仏教文化研究所紀要』43、2004.11）に詳細な論がある。同論ではツレ6葉（当該2葉は含まれない）に基づく形で、清原宣賢『長恨歌抄』を和文化した1本、ないしは、そこからさらに派生した1本か、と指摘されている。た

だし現存する関連諸伝本間における位置づけなどは、なかなか明確にはしづらいたもいう。

ここで注目されるのが、飛騨高山まちの博物館（旧・高山市郷土館）蔵「長恨歌注」なる、江戸時代前期頃写の列帖装1帖の1点である（国文研マイクロ資料72-39-4、小林論では未言及）。これも宣賢抄の相当部分を和文化したものとみられるが、それが当該断簡の本文と、非常によく一致しているのである。また両者の書式——『長恨歌』の各句を見出しとして一番高くに掲げ、注釈部分は1文字下がりほどとする——なども共通している。もっとも少々の異同は存し、また高山本では宣賢抄の漢文部分がそのまま残されているところもあるが、高山本のその漢文に施された訓読がまた、当該断簡の和文とほぼ同一ともなっている。そうした点、本文の生成過程としては、直接か間接かは不明ながらも、宣賢抄→高山本（多く和文化）→当該断簡（すべて和文化）のように捉えることができようか。当該断簡のさらなるツレの集成と、高山本そのものの調査研究、及び宣賢抄や関連諸本との比較検討などをあらためて進めていけば、江戸時代初期前後における『長恨歌』の研究史・受容史や、それらの流布状況の一端などを、より明らかにしていけるだろう。（久保木）

## 28 『懐風藻』 天和4（1684）年・[京] 長尾平兵衛刊 袋綴2冊

香色表紙（縦27.3cm×横16.8cm）。表紙左肩後補題簽「懐風藻〈淡海御船撰〉 花（鳥）」。上冊見返し（四周単辺・縦19.6cm×横12.5cm）「星彩射斗波瀾衝山／懐風藻／銅駝坊碧鷄堂繡梓」。巻頭に撰者某による「天平勝宝三（751）年歳在辛卯冬十一月」の「懐風藻序」及び「懐風藻目録」あり。内題「懐風藻」。料紙、楮紙。四周双辺（縦18.9cm×横12.8cm）、無界。毎半葉8行。一行17（一部18）字。版心、白口単黒魚尾下向「懐風藻 幾（丁数）」。本文は漢文、返り点、送り仮名等あり。尾題「懐風藻〈終〉」。

下巻末に山重顕（山脇道圓）による跋あり。同跋によれば、「儒臣直之雅士」（未詳）による校訂本。山脇道圓（生没年未詳）は山崎闇齋門の儒者・医者。著書及び校点本に『八陣図説』（1667序刊）、『増補下学集』（増補者・1669）、『分類補注李太白詩』（校点者・1679）等がある。

巻末に奥書あり。「〈本云〉長久二（1041）年冬十一月二十八日燈下書之／古人三餘今已得三者也、文章生惟宗／孝言」の本奥書、尾題に続き「此書蓮華王院宝蔵之本也、久埋塵埃人／不知之、康永元年（1342）之比撰出之、上古之風／味尤有興、仍今書写之」と記される。およそ300年の間、蓮華王院の宝蔵に人知れず秘蔵されていたと伝える。現存諸本はすべてこの奥書を有し、惟宗孝言本系統から発する（大系・小島憲之氏解題）。

刊記「天和四（甲子）歳正月良辰／銅駝坊書肆／長尾平兵衛刊行」。天和4年版に続く、宝永2（1705）年刊本は天和版を校訂、寛政5（1793）年刊本は宝永版を校訂し刊行された。

本書に見られる、ページ数、改行位置、活字のポイント数の指定等の書き入れから、塚本哲三編『新撰名家詩集』（有朋堂書店・大正12）所収の『懐風藻』の底本（同書には底本については触れられていない）に用いられてことが判明する。（修士2年・高橋裕美／伊倉補）

## 29 『新撰和歌集』 [元禄8（1695）年・大坂・河内屋吉兵衛等3] 刊 後印 阿波国文庫旧蔵 袋綴1冊

納戸鼠色表紙（縦26.4cm×横16.4cm）。表紙左肩刷題簽「〈新／撰〉貫之髓腦 〈八雲録内／一之二〉」（定家様）。巻頭に「新撰和歌集序／玄番頭従五位上紀朝臣貫之」あり。内題「新撰和歌集巻第一（～四）」。料紙、楮紙。無辺無界。毎半葉8行。字高約18.0糎。1首1行書。版心「幾（丁数）」。本文、漢字仮名交じり（序は漢文）。尾題「新撰和歌集終」。後表紙見返しに「新撰三百六十首和歌は／紀貫之の玄の中より玄をえり／出して書抜給ふをある人の箱／の底に古しへより秘してをけ／るをもとめ出して今改めて／板行することしかり」（定家様）と記す紙片を貼付するが、これは元禄8年刊本の刊記より「元禄八年仲夏」の刊年及び三都の版元（大坂・河内屋吉兵衛、京・天王寺屋市良兵衛、江戸・須原屋茂兵衛）を削ったもので、本書印行の版元は不明。

外題の「八雲録内」も未詳。元禄8年刊本の外題は「新撰和歌集」とあるのみ。元禄11年大坂・村田庄右衛門求版後印本の外題に記されるようになるので、その時点でおそらくは歌書（「八雲」とあるので歌書であろう）シリーズのうちの1点として刊行されたと推測されるが、他作品については不明。

印記、巻頭及び巻末に「阿波國文庫」（子持枠長方形朱印）を捺す。蜂須賀家旧蔵本。（伊倉）

### 30 『土佐日記』 寛永20（1643）年・京・風月宗智刊 契沖手沢 彰考館・川瀬一馬遞藏 袋綴1冊

改装香色表紙（縦27.0cm×横17.7cm）。表紙左肩楮紙書題簽「土佐日記 全」。内題なし。料紙、楮紙。四周単辺（縦21.4cm×横15.5cm）無界。毎半葉10行。字面高さ、約21.0cm。版心「土佐 幾（丁数）」。墨付、30丁。漢字仮名交じり。振り仮名あり。和歌1首1行書。刊記（30丁ウ）「寛永二十歳孟春吉辰／二條通観音町風月宗智刊行」。外題に彰考館の印文未詳（神代文字か）の方形朱印、1丁オに「彰考館」の瓢筆型朱印を捺す。また表紙右肩に「巳四拾一」と同館の函号を記す。

契沖筆の考勘付箋が2丁オ、15丁ウに各1枚、27丁ウに2枚（一連のもので元来は1枚）、糸で縫い付けられている。同付箋の内容は『契沖全集』第16巻（1976岩波書店）に翻刻がある。三手文庫本契沖書入の同版本と共通する内容の書入であることが知られている。その他、朱による合点、読点、清濁、訓み仮名、本文の校訂等多いが、契沖によるものか不明。

巻末に1丁を新たに加え、旧蔵者川瀬一馬氏が昭和16年に本書を入手した際の経緯等を記して、署名、押印（「一馬」六角形印刻朱印）する。

その他「俊宏蔵」（長方形朱印・30丁ウ）の蔵書印が捺されるが、印主は不明。（伊倉）

### 31 『土佐日記』 [寛永20（1643）年・京・風月宗智] 刊／京・出雲寺和泉掾求版後印 袋綴1冊

縹色表紙（縦25.0cm×横18.2cm）。表紙左肩香色刷題簽「土佐日記」。以下、30に同じ。刊記「萬治二（庚子）初春吉祥日／〈寺町通圓福寺前町〉秋田屋平左衛門板行」は寛永20年の刊記を削り取って入れ木した上で、新たに刻したもの。本書にはその奥（後表紙見返し）に「京都三條通升屋町／〈御書物所〉出雲寺和泉掾」という刊記が追加されており、さらにその求版後印の本である。（伊倉）

\* 2016.10.31修訂第5版